
みずはさんの場合

千鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みずはさんの場合

【Nコード】

N8071Z

【作者名】

千鶴

【あらすじ】

異世界トリップしちゃった彼女の場合、第六段。

女子高生の瑞葉さんは、常日頃異世界に行きたいと願っていました。ある日突然それは叶えられたわけですが、さて、彼女はとなったのでしょうか。

（前書き）

あまり良くない表現（犯す等）が出ます。
ご注意ください。

いつか、こんなことがあればいいーな、なんて思っていた。

あたしは微温湯に浸かっているようなもどかしさを感じながら、毎日を惰性で生きていたから。

小説や漫画とかでよくあるような話に、正直、秘かにでも憧れていた。

毎日毎日、本当にわが身に起きてくれないものかと思っていた。

いつ死んでもいいーや、とまで思っていたのは、不謹慎でわかつてるけど、確かなんだ。

けれども現実と妄想って、そりゃそーなんだけど、やっぱりすごく違うものなんだよね。

そして今までの安穩とした生活が、何より幸せなことなんだって。恵まれていたのに、あっさり手放したいだなんて思っていたこと。それがどんなに傲慢だったか、身に染みて、ようやくわかった。

まあ、今になってわかったところで、もう遅いんだけど。

「ご主人ー、終わりましたよお」

「そうか、次はカーテンだな」

「えー！昨日取り替えたばかりじゃないですかあ」

へとへとになりつつも終了したことを主へと報告をすれば、休む間もなく次の指示が飛んだ。

本当に人使い荒い人だよ、まったく。

てゆーかカーテンまじ昨日死にそうになりながら洗いあげましたけ

どー！

大きな窓を覆う幾枚ものカーテンは、1人で洗おうと思うと一日仕事になりかねない。

というか、むしろなつた。

そもそもがあたしがやるんじゃないや時間かかるのもしようがないし。

だってここは今まであった便利な家電なんかひとつもない。

手でせっせと洗いあげるしかないと知った時、あたしがどれだけ絶望したことが。

「じゃあ窓を拭け」

「・・・わかりましたけどー、ちよつとは休憩させてくださいよおお」

もー疲れたよー！

「・・・ミズハ」

そう弱音を吐けば、現在あたしを雇ってくれているご主人様から、すごい勢いで睨まれた。

綺麗な人が睨むと怖いんだから止めてよ、もー。

ほんと無駄に美形なんだからなあ。

「わかった、わかりましたよう、そんな睨まないでくださいー」

「無駄口を叩かずに働け。穀潰しになりたいか」

「なりたいたいっちゃあなりたいたいけどお、それを許してくれないじゃないですかあ」

ニートは全人類の夢ですよ！

「わかつているなら動け。働けなくなったら追いだすからな」

「鬼畜う・・・」

「何か言ったか」

ぎらつとご主人の眼が光った。

やだもー、地獄耳！

「何も言つてませーん！お掃除行つてきまっすう！」

これ以上主に睨まれる前に、さっさと逃亡した。

ほんと怖い人だよ。

その背後で、密やかに吐かれる悩ましげな溜息のことなど、当然あたしは知る由もない。

あたしがある日突然世界を越えたのは、今はもう2年前のこと。

学校行くのだるいーなんていいながら歩いてきたときだった。

寝坊して友達に置いて行かれて、珍しく1人だったんだよね。

それが幸か不幸かなんて今更どうでもいい。

来ちゃったものは仕方ないし、過去のことは今更どうしようもないし。

けど、そのきっかけは、今思い出しても相当あほらしいと思うんだ。

それは、あたしの足がたまたまそこにあったマンホールを踏んだ、
たったそれだけ。

「ぎゃっ!？」

当然返ってくると思っていた感触が、次の瞬間にはなくなった。
あると思った地面がなくなるって相当びっくりするよね。

リアルに心臓が口から飛び出るかと思ったよ。

突然の浮遊感に、可愛げもない悲鳴が飛び出たのだって仕方のない
ことだと思う。

そもそもあたしって可愛げない女だしーしょうがないよねーって、
話それた。

そんなこんなで、あたしはこの世界に落っこちたってわけ。

それから、正直あんま思い出たくないけど、けっこー悲惨な目に
遭った。

落ちた時には意識がなくなってたから、地面に衝突したのかしてな
いかわからないけど、とりあえず怪我がなかったことだけは感謝
すべきかなあ。

目が覚めた時には、どこかわかんないけど、以前写真で見たオラ
ンダの田舎町みたいなのに居た。

さっぱり何が何だかわかんなくて、泣くに泣けなかった。

最初は言葉も通じなかったしね。

チートとかのお約束がみーんななかったのは、ちょっと困った。

だって、あたしが混乱してる間に、人生初、人攫いに遭っちゃった
から。

そこから地味ーな転落人生ほかった。

見るからに脂ぎったガマガエルみたいな成金親父に買われちゃって。

奴隷みたいにつてか、まさしく奴隷だね。

朝昼晩働かされて、たまーに気が向けば犯された。

初めてがガマガエルつてのはまじ死ねると思ったなー。

いや、死ねなかったけど。

なんか悔しくて。

それから、帰り方もわかんないしこんな辛いめにあつてまで生きてる意味がいよいよわからなくなつて、でも死ねなかったから、とりあえず逃げることを考えた。

いやあ、人生であんなに必死になつて頭使つたの初めてです。

良く考えたら、こつち来てからやたら初めてづくしだったんだよねーははは。

それはいいとして、必死に逃走方法とか、経路とか、どうしたらいいか考えた。

館に住む人間のスケジュールを把握して自分の仕事の合間に逃げ道探して、隙あらば金目の物を溜めこんで・・まあそこは微々たるもんだっただけど。

そうしてある夜に、ようやく機会を得て、あたしはそこから逃げ出したんだ。

1年半そこに居ただけ、あたしは自分の忍耐力を誇りたいわけだけど。

多分それだけそこに居て、その間あんま抵抗とかしなかったから、ガマガエルも油断したんだろうね。

最初は逃亡防止に鉄輪を脚に着けられてたし。

そんな感じで逃げたは良いけど、その後がまた困ったわけで。

言葉なんてろくにわかんないし勿論地理なんてさっぱり。

食べ物だって持ってなくて、普段与えられてた食事も微々たるもの。早々に、野垂死ぬのがオチだつて、考えたらあたしにだつてわかつた。

けどどうしてもあそこで死ぬのだけはやだったんだから、しょうがないよね。

逃げ出して5日目、あたしは路上で倒れ込んだ。

歩く力が無くなって、座る事も出来なくなって、あたしはそこで初めて泣いたんだ。

何でこんな目にあっただらうって、思うよねやっぱり。

確かに望んではいたけどさあ、他の世界に行きたいって。

でも理由がわかんないや流石に理不尽だよって、思うよね？

苦しくて痛くて気持ち悪くて、でもそれ以上に悲しくて寂しくてしようがなかった。

家族に会いたくて、友達にも会いたくて、こんなんでも好きな人が居たんだよ。

告るなんてしんでもむり！なんて思ってたけど、こんな目に遭ってもう二度と会えないんだってわかってたら、きっと特攻してたあたし。

我ながら追い詰められなきゃやらない屍の重たさに、ちょっと笑いがこみ上げた。

でも、ちゃんと笑う力もなかったあたしは、口角を緩めただけだった。

そんでそろそろダメになって、わかったんだ。

死期を悟るってゆーのかな、でもこれで楽になれるって、ちょっとほっとした。

今までぬくぬく生きてきたふぬけに、この奴隷生活は厳しすぎました。

疲れちゃったよって、あたしは目を瞑ろうとしたんだっけ。

いや、瞑って、もうこれでさよならだって意識を手放した。

それから。

何でか知らないけど、まだ今あたしはこうして生きてる。

今いるお館のただ一人のご主人さまに雇われて、ハウスキーパーとして。

ハウスキーパーっていうかメイド？っていうか何でも屋さん？

やってること自体は、実は奴隷時代とそう変わらない。

でもあの頃はもつとくだらない雑用がメインだったから、ここに来てから初めてやる仕事も多い。

それなりに広さのある館には何故かご主人とあたししか居なくて、必然的に家事は全部あたしの仕事。

毎日が忙しくて目まぐるしくて、辛かったころを思い出す暇もないのに救われたかなあ。

ま、けどやっぱり新しいご主人はやたら人使い荒いから、少しは人増やして欲しいと思わないでもない。

そろそろ過労死しちゃいますよ、あたし。

貧弱なのよ現代人。

あ、あたし限定か。

「おい、さぼるな」

「やってますようー」

窓の棧を拭きながら、お茶を飲みながら優雅に後ろで監視しているご主人に口答え。

それが許されてるってことが、なんだかそれだけ気を許してくれてるみたいで、ちょっと嬉しい。

ちなみに今着ているのはメイド服みたいなお仕着せで。

かっちりした布のそれは、長さが足首くらいまであって、ちょっと動きにくい。

なんせあたしは、元じょしこーせー！

丈をひざ上にわざと改悪し、動きやすいように勝手に変えっちゃってます。

だつて足首までつてなんかもによする。動きづらいよ。

それをみたご主人に怒られたけど、これで外出ないからつて説き伏したあたしグッジョブ。

仕事の能率アップにご協力してくんなきゃ困るのはご主人ですよつてね。

「はいっしゅーりょー！夕飯の買い物に行つてきますっ」

「おい」

「わあかつてますよく着替えますって」

「・・・そんなことを言つて、この間も忘れてそのまま行つたらう」

「いやん、ご存知でしたか。うつかりしててー」

「うつかりじゃない。わかっているんだらうな？」

ぎらつと眼光鋭く睨まれて、顔は笑顔を保つたまま、内心でうひいと奇声をあげてしまった。

だから怖いんだつてばあ。

けど、この世界つてほんとめんどーです。

いいじゃん膝上くらい。足出すくらいなんだつてーの。

そんなことを思つたけど、こちらの基準では女性は肌見せしないんだとか。

中世とか基準がそんな感じー？止めてよねもー。

まああたしはただの雇われの身ですし、ご主人の評判を落としたいわけじゃない。

今の生活は、なかなか気に入っているのだ。

「じゃ、行つてきまーす」

「・・・いや、まで、ミズハ。私も行く」

「えー？いいですよ、忙しいんですから仕事してください」

「行く」

「・・・別にいいですけどお」

「玄関で待つてろ、すぐ行く」

「はあい」

丈の長いお仕着せに着替えて、出かけることを告げると、珍しく主人までついてくるらしい。

どーいう風の吹きまわしー？

何か食べたいもんでもあつたかなあ。

ご主人はあたしを拾ってから、言葉もまともに喋れないあたしに生きる為の必要最低限の知識をくれた。

だから今はもう独りで生きていくことだって可能になった。

ご主人はそれを知ってるはずなんだけど。

まあ、1人で行くより寂しくないからいいかあ。

「行くぞ」

「はい。ご主人、今日は何が食べたいですかー？」

「・・・別になんでもいい」

「そーゆーの一番困りますって言ってるじゃないですかあ」

「ミズハが作るものだから、何でもいい。ダメか？」

「・・・わーお不意打ちー」

最近何が困るって、こんな感じでご主人がデレたりすること。

それこそ、どーいう風の吹きまわしなんでしょーか。

死にかけたところ拾ってくれた恩人で、そっけなくも随所に気配りしてくれて、おまけに美形のご主人。

これで惚れなかったら女じゃねーよってねえ。

しかしそれはこちらだけの都合だし、ご主人には関係ないことなんだ。

だから別に、ただの小間使いにご主人が優しい言葉をかけてくれる必要もない。

なのに、ツンデレってこーいうのかなあってなんか最近良く思うようになったのはどーしてかしら。

ご主人の言葉に思わず顔を赤くしちゃうあたり、あたしってほんとわかりやすいよねえちくしょう。

それを見たご主人がにやりと悪戯成功したみたいに笑うのも、もーね、ツボなの。

ええいこの野郎、顔があげられないじゃないかー。

「ミズハ、腹が減った。行くぞ」

「はあーい・・・」

楽しげな顔を即座に引っ込めて、ご主人はお店へ向かっていく。

ああ、あたしがこの人に勝てる日って、多分一生来ないんだろーない。

それでもいいから、もうちょっとお側に置いてくれるよう、あたしはただただ祈るしかないのであつた。

始まりは突然で、悲惨な目にも遭つてきたけど、今あたしは幸せです。

あたしの中では現在進行形の異世界トリップ。

これは、ご主人に拾われた、あたしこと瑞葉のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8071z/>

みずはさんの場合

2011年12月25日20時47分発行